



臨床検査医学講座

甲状腺および臨床検査の研究から 福島県の復興へ



主任教授 志村 浩己

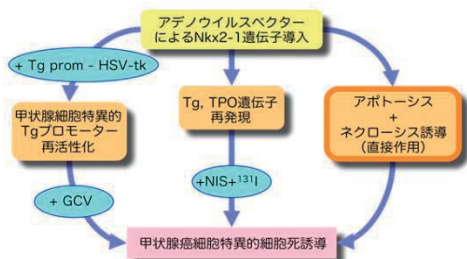
臨床検査医学と聞いて、どのような分野がイメージできるでしょうか。まずは臨床検査医学について、そして当講座で取り組んでいる研究について簡単に紹介いたします。

臨床検査は、大きく検体検査と生体検査に分けられます。検体検査は、血液、尿、喀痰など体から採取したものを調べます。一方、生体検査は、機器などを体に直接装着して行う検査であり、心電図、聴力、超音波検査などに代表されます。診療においては、疾患の診断、病状の評価、治療効果の判定など様々な場面で、客観的情報として欠かせないものとなっています。しかし、検査結果は皆様が考えている以上に不安定であり、検査結果が医療機関によって異なることや、仮に2回同時に調べた結果が異なるようなこともありえます。臨床検査医学の役割の一つとしては、どの施設で誰が担当しても同じ結果が出るような高い検査精度を維持することと、さらにその結果を診療科にフィードバックし、適切な助言を行うことです。もう一つの重要な役割は、新たな検査法の導入とその評価および自ら新規検査法を開発することにあります。

当講座は附属病院検査部と連携してその運営にあたりるとともに、新たな検査の評価・導入などを行っています。また、当講座の研究としては主には甲状腺に関する基礎的研究と臨床的研究を2本の柱としています。

甲状腺癌の分化誘導に関する研究

甲状腺癌は一般的に予後が極めて良い悪性腫瘍であり、転移したとしても放射性ヨウ素内用療法が有効です。しかし、分化度が低下すると、癌細胞の増殖・転移能が高まるとともに、放射性ヨウ素の取り込み能も失ってしまいます。当講座では癌細胞への転写因子Nkx2-1の導入により癌細胞の細胞死が誘導されるとともに、分化度の上昇が認められることを明らかにしています。(図) 現在、この分子生物学的な機序を明らかにすることを目的に研究を進めており、この成果から甲状腺癌の分化度を評価する新たな検査法の開発を行っていきたく考えています。



図：Nkx2-1 遺伝子導入による脱分化甲状腺癌細胞の細胞死誘導効果

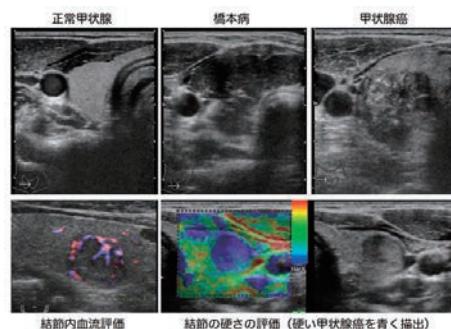


甲状腺疾患の超音波診断に関する研究

これまで当講座では甲状腺超音波診断の進歩に寄与すべく、甲状腺超音波診断の基礎的および臨床的研究を推進しています。これまでも、甲状腺結節超音波診断基準策定のための研究等を行ってまいりましたが、さらに現在、甲状腺超音波検査の標準化や精度管理方法の開発を試みており、新たな提言をすべく研究を進めています。

県民健康調査「甲状腺検査」に関する研究

2011年に福島第一原子力発電所事故が発生したため、福島県では県民健康調査「甲状腺検査」を行っています。当講座では、甲状腺検査の運営に全面的に協力するとともに、得られた結果を解析する疫学的な研究を推進し、福島県民の皆様に、より多くの新たな知見をフィードバックしていきたいと考えています。(写真)



写真：甲状腺超音波検査

甲状腺関連血液検査の標準化に関する研究

甲状腺ホルモンなどの血液検査では、検査試薬が異なると検査値も異なってしまうのが現状です。現在、当講座では質量分析法などを利用した各検査法の分析を進めており、甲状腺に関する検査の標準化に寄与していきたく考えています。

また、当講座では臨床検査技師の大学院生および研究生が現在6名在籍しており、各々の専門分野に関する基礎的および臨床的研究を行っています。当講座では今後ますます活発な研究活動を行うことにより、福島県全体の臨床検査のさらなるレベルアップと被災した福島県の復興に少しでも寄与していきたいと考えています。